

バングラデシュからの手紙 2004 年

ブラザー・フランクからのメッセージ

友人のみなさんへ

ブラザー・フランクより
マイメンシン(バングラデシュ)にて
2004年1月6日 主の公現の祝日に

(翻訳の一部改訂：2004.2.29)

約30年にわたって、わたしたちテゼのブラザーたちはこのバングラデシュで生活し、最も貧しい人々の中に身を置くことによって「信頼の巡礼」を歩んできました。この最も貧しい人々の中にはヒンズー教徒やキリスト教徒もいますが、ほとんどはイスラム教徒です。苦悩の日々は限りなく、絶望感によって心を閉ざしたくなる誘惑にも襲われます。30年前、初めてカルカットでマザー・テレサにお会いしたとき、彼女はわたしにこう語りました。「ブラザー、あなたの心の心が石の心にならないように注意してください。」彼女は、貧しい人々の中で生活し続ける困難さをよく御存知だったのです。この彼女の言葉は、さまざまな状況の中でわたしたちを導いてくれました。そしてわたしたちは、神さまの愛の言葉を、ただ言葉だけでなく、自らの生き方を通して語ろうとしてきました。

今までのみなさんへの手紙の中で、貧しい村々やスラムで始めたいくつもの小さな学校のことを記しました。また1977年にこのマイメンシンで始めた「障害者コミュニティセンター (CCH)」に集まる障害者のことも記しました。また去年バングラデシュ各地で開かれた障害者たちの巡礼のプログラムのこと、そこに集まった数百人の障害者たちとその家族のこと、ボランティアとして参加した青年たちのことなどもお知らせしました。さらに、新しく始まった「アシャニール (希望の家)」というラルシュの家に自分のホームを見出したリコ、ショハジ、バッピーという知的障害の子どもたちのことも記しました。このような、弱く傷つきやすい人々が、このバングラデシュにおけるわたしたちの巡礼の中心です。彼らが、行くべき道を示してくれるのです。

宗教の異なる人々が一緒に歩いていくとき、それぞれ文化がとて異なるときに、互いに学び合うことがたくさんあることに何回も気づかされます。もう長い間イスラム教徒、ヒンズー教徒、キリスト教徒と一緒に生活しているというのに、互いのことをほとんど知らないのです。確かに互いの宗教に関して少しの知識はあるかもしれませんが、でもそのほとんどはほんの表面的な、しかも思いこみの知識に過ぎません。しかし、傷つきやすく弱い人たちは、宗教の異なるそんなわたしたちを「彼らに仕える」という共通の使命に招き入れることによって、表面的な知識とは違う仕方互いを理解する道を示してくれます。彼らは、す

べての人の中にある神の光を指差します。彼らは、異なる宗教のわたしたちみんなの中で憧れが燃えていることを教えてくれるのです。正義、平和、喜び、愛への憧れ。

一緒に旅をしながら互いの物語に耳を傾けると、互いの心を感じるようになります。その言葉が進むべき道を教えてくれます。特に、弱く傷つきやすい人々は、わたしたちみんなが共通に持っているもののことを繰り返し教えてくれます。いのちの尊厳への憧れ、平和と喜びへの憧れ、そして愛されたいという憧れ。そしてみんなの中に、より良い明日への夢と希望が息づいていることを知らされるのです。

しかし、日本の40%ほどの面積のこのバングラデシュに生活する1億5千万の人々の多くにとって、明日はとても暗いのです。

未来は真っ暗だとこの国の多くの人々は感じています。若者もそう感じています。青年たちは、人生の方向を見つけられないまま、職につけるのはほんの一握りの人たちであることを知りながら、今可能な勉強を続けています。その苦悩にわたしたちの心は痛みます。絶望感、ドラッグや自暴自棄な行為に若者を走らせます。彼らも生きる意味や幸福を探し求めているのです。学校での教育は、ほとんどの場合、言葉では表せないほどひどい状況です。教師のほとんどは、学校での働きをおろそかにして、より収入の多い家庭教師の仕事に関心があります。学校や大学のほとんどの青年たちは貧しいので、家庭教師につくことが出来ず、その結果試験に落ちてしまいます。その上毎年学費は値上げされています。基本的な教科書も購入できません。その教科書も頻繁に変わるので、中古の教科書も長く使えません。あらゆる所で私的な塾が幅を利かせています。そして、ほとんどの教育機関において、この国の若者の未来を整えてゆこうという教育への情熱がまったく欠乏しているのです。

何年にもわたって、わたしたちはたくさんの貧しい学生たちを支援してきました。マイメンシンやダッカの青年たち、そして何よりも都市から遠く離れた村々の青年たちを支えてきました。中でも、わたしたちと一緒に「信頼の巡礼」を歩もうとする青年たち……イスラム教徒、ヒンズー教徒、キリスト教徒の青年たち……を特に助けようとしてきました。自分自身の未来にだけでなく、この国の未来に夢を持つ青年たち。実に多くの青年たちが勉学のための経済的な支援を必要としています。多くの青年がわたしたちの戸を叩きます。わたしは、彼らの物語に何時間も耳を傾けてきました。そして自らに問うのです。「わたしたちブラザーたちの夢を、どのようにしたらこの青年たちと生きることができるだろうか。復活されたキリストの福音によってわたしたちの内側に生まれた夢、分かち合

いと正義と愛を生きる社会という夢。」

障害者たちと巡礼を共にするとき、青年たちの寛大な心が見えてきます。障害者への介助の体験は、彼らの心を動かします。他者のために何かが出来たとき、彼らの中の最高のものが立ち現れます。このマイメンシンのテゼの家には、毎月一回、知的障害者とその両親が一日のプログラムに集まります。障害者が生まれると、家庭を捨ててしまう父親がたぐさいるので、障害者とその母親だけの家族も少なくありません。多くの青年たちが、これらの人々の一日を喜びの一日とするために自らを差し出してくれるのです。

このような青年たちの勉学を何とか支援しようと模索してきました。彼らには一ヶ月6ドル(650円)を支給します。村に住み、自宅で勉強する青年にとってはこの額で足りるのです。(都市で生活する青年にはこれでは足りません。)6ドルを支給される代わりに、青年たちは自らの村で毎日2時間無料で、貧しい子どもたちに教えます-----木の下で、自宅の軒下で、村の寺小屋で-----。マイメンシンの街で、青年たちは障害者や病人を訪問し、貧しい生徒たちの宿題を手伝うのです。みんな、他者を助けることが自らの人生に意味を与え、自らの成長の助けになると感じます。毎月一回この青年たちはテゼハウスに集まり、体験を分かち合います。これらの体験が、それぞれの人生を整えてゆくことをわたしたちは願ひ続けます。

信頼の小さな橋を築いてゆくために、実に多くのことが可能です。この可能性を模索する中で、わたしたちは気付きました。貧しい人々や弱く傷つきやすい人々に共に仕えることが、聖書やコーランやギター(ヒンズーの聖典)の道を何と示していることかと。これらの経典はどれも神のあわれみを語っているのではありませんか。これらの経典はどれも、外国人に、孤児に、見捨てられた婦人に、障害者に心を開くようにとわたしたちを招いているのではありませんか。わたしたちは共に「ウビ カリタス、イビ デウス エスト」(愛のあるところ、そこに神はおられる)と歌うのではありませんか。

何年も前、わたしは他のブラザーたちとカルカッタに住んでいました。そのとき、マザー・テレサはこうわたしに言ったのでした。「ブラザー、貧しい人々のところにゆくのです。あなたの両手に彼らの手を包み、祈るのです。この街(カルカッタ)は貧しい人々の祈りによって生きるのですから。」弱い人々、傷つきやすい人々のところにとどまるこんな素朴な生き方は、日本でもバングラデシュでも真実の道ではありませんか。

この手紙を終える前に、マイメンシンのふたりの女性をご紹介します。どうか彼女たちが、わたしたちの心の、そして公現の祝いの食卓の、特別なゲストとなってくれるように。どうかあなたも短い沈黙のときを過ごし、彼女たちを祝福してくれるように神さまに祈ってくださいますように。祝福、イスラム教徒、ヒンズー教徒、キリスト教徒、若者、貧しい人々にいの

ちを与える祝福を。

最初にスミを紹介します。スミは高齢でとても貧しい婦人です。彼女はベンガル人のキリスト教徒の家に生まれました。しかし、イスラム教徒と結婚し、その結果、彼女の家族からは拒絶されました。結婚生活は長続きしませんでした。もう何年も前にわたしたちは彼女に出会いました。彼女はいつも健康を害し、空腹でした。しかし、彼女は勇気の人でした。毎日、古いレンガを集めそれを売ってわずかなお金(数十円)を稼いでいたのです。古いレンガは新しいものよりも安く、彼女はそんな古いレンガをゴミの山や壊された壁や道路の掘り返しから見つけてきて売っていました。街のゴミはこのテゼの家近くの川辺に捨てられていました。そんなことから、彼女はよくわたしたちのところに来て休憩していました。そんな日々が長く続いた後に、彼女は身体を壊すことが重なり、わたしたちに助けを求めました。そこで、彼女のために竹の壁とワラの屋根の小さな小屋を建てました。この冬、温度が下がり、ベッドと毛布を彼女のために購入しました。毎月数回彼女はここに菓を受け取りに来ます。そしてわたしたちは、米を買うための5ドル(540円)を彼女に差し出します。しかし同時に彼女は、物語を分かち合うため、泣くために来てくれます。そしていつも彼女のために用意している砂糖入りのホットミルクを楽しんでくれます。

アズモンも毎月数回ここにやってきます。腰が曲がり長い杖を使って歩く女性です。このテゼの家のすぐ側に流れるブラマプトラ川の川向こうに、彼女のために小さな小屋を建てました。彼女もイスラム教徒です。子どもはいなくて、彼女の世話をする家族は誰もいません。わたしたちが彼女の家族です。彼女はわたしよりずっと年上なのですが、それでもわたしのことを「ダドゥ」(おじいさん)と呼びます。彼女はわたしたちから毎月5ドル(540円)を受け取ります。これで米と1ヶ月の生活費に足りるのです。近隣の人たちは、彼女に油や野菜や塩を分かち合います。ここに来るとき彼女はいつも、手作りのクッキーを持ってきてくれます。「そんなことしなくていいよ」とわたしは言います。本当に何も持たない人なのですから。それでも彼女は何かをわたしたちに分かち合いたいのです。彼女はいつも昼時に来ます。わたしたちが、この小さな聖堂で昼の祈りをしている間、聖堂入口近くの木陰で彼女は待っています。その後、わたしたちや若者たちと一緒に、わたしたちの素朴な昼食-----ごはんと豆スープと野菜-----を、若者に囲まれる幸せなおばあちゃんとして食べるのです。彼女の存在は、いつもわたしたちにとって宴となります。彼女の輝く顔は、平和と喜びを与えてくれます。そして彼女の手作りのクッキーは、いつもいつも、「心の善さ」の物語をわたしたちに伝えてくれます。これは、人生を美しくする、すべての人に注がれている神さまからの贈物のことなのです。

ブラザー・フランク